

小論文

(80分)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は7ページあります。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁または解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせてください。
4. 解答はすべて、別紙解答用紙の指定された箇所に記入してください。
5. 受験番号、氏名、フリガナを解答用紙の受験番号・氏名欄に必ず記入してください。
6. この問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。

問題

以下の3つの資料はそれぞれステレオタイプや偏見、差別について書かれたものです。

資料1は2018年9月28日付の日本経済新聞の記事「『日本人に代われ』働く外国人、差別深刻に」です。

資料2は上瀬由美子著「ステレオタイプの社会心理学：偏見の解消に向けて」（サイエンス社、2002年）の第2章からの抜粋です（ただし、一部表現を修正した箇所があります）。

資料3は加賀美常美代著「グローバル社会における多様性と偏見」（加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏 編著、『多文化社会の偏見・差別—形成のメカニズムと低減のための教育—』明石書店、2012年、第1章）からの抜粋です（ただし、一部表現を修正した箇所があります）。

3つの資料を読んで、以下の2つの課題に800字程度で答えてください。それぞれの課題の字数配分は自由です。

課題1 資料1にある「日本で働く外国人に対する差別」がなぜ生じるのかを、資料2の内容に基づいて説明してください。

課題2 私たちの社会には、年齢、ジェンダー、性的指向、言語、宗教、障がいなど多様な差異が存在します。そして、それらが偏見や差別につながる場合があります。外国人に対する差別に限らず、私たちの社会に存在する偏見や差別にどのように向き合うことが必要であると、あなたは考えますか。資料3の「グローバル社会における多様性」の内容とあなた自身の経験を踏まえて具体的に述べてください。

資料1 「日本人に代われ」働く外国人、差別深刻に

「日本人に代われ」「まともな日本語を話せ」——。小売店や飲食店で働く外国人が増えるなか、客などから嫌がらせを受ける事例が相次いでいる。外国人への偏見は根強く残り、企業や行政は安心して働ける環境づくりに苦慮している。

「お会計のことを言っても僕の日本語が分からないふりをされた」。東京都内の飲食店でアルバイトとして働く台湾出身の男性(27)は3カ月ほど前、日本人男性の食い逃げに遭った。高額な注文を繰り返し、総額13万円以上。店には外国人店員しかおらず、日本人の社長は不在だった。

「接客中、日本語が分からないから日本人に代われと言われることはよくある」と男性は言う。客だけではない。社長から日本人バイトとは違う扱いを受けたと感じることも。「客が出た後、3分以内にテーブルの上を片付けろ」と外国人だけ指導されたという。

中国から留学してきた女性(23)はコンビニでバイト中、レジで「量販店ではもっと安い」と値切られた。日本語が分からないと言われたこともあった。

2人とも日本語能力は高く、日常的な会話は問題ない。それでも外国人と分かるとう嫌がり、わざと困らせる客がいる。「でも誰も助けてくれない」と嘆く。

茨城県のコンビニ店長は「外国人バイトが『まともな日本語を使え』と言われ、『日が浅くてすみません』と代わりに謝ったことがある」と振り返る。「敬語が使えないくらいで何を言うのか」と憤る。

人手不足が深刻になり、外国人労働者が増えている。厚生労働省によると、2017年10月末時点で約128万人。特に接客業では客からの暴言や人種差別に遭いやすい。法務省が昨年公表した在日外国人への調査では、約3割が「侮辱されるなど差別的なことを言われた」と答えた。

後略

資料2 ステレオタイプの社会心理学：偏見の解消に向けて

社会心理学では、なぜ人がステレオタイプ^{*1}を抱いたり、偏見をもって他者をみてしまうのかを明らかにしようとさまざまな研究を行ってきました。

中略

ステレオタイプ・偏見を生じさせる背景を考える視点として、認知傾向に注目した研究を紹介します。この知見では、私たちの認知メカニズム自体に、ステレオタイプや偏見を形成しやすい特徴があると考えています。

中略

私たちの住む世界は多様で混沌としていますが、カテゴリー化によってそれが主観的に単純化され、整理され、知覚^{*2}できるようになっています。カテゴリーにあてはめて対象を知覚するというカテゴリー化の過程は人間の知覚全般に関わるもので、外界への適応のために必要不可欠です。図を見てください。

この図1の中にはさまざまな円がありますが、「いろいろな円がある」というだけでは状況を把握しにくいし、記憶もされにくいでしょう。ではこれを「大きい円が四個」「小さい円が六個」と考えたとします。この時点で、私たちの頭の中では、図2のように円の大きさをもとにカテゴリー化が行われています。単純に複数の円があるという認知から、大きい円と小さい円があるにとらえることで、より整理された認知になっています。

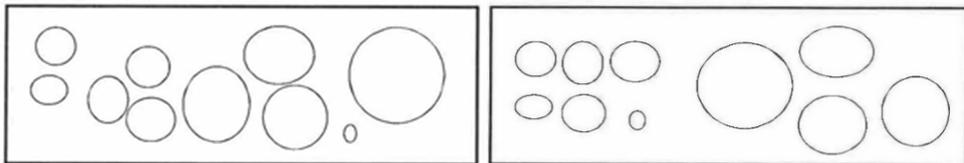


図1

図2

このカテゴリー化の過程は、私たちが毎日の生活でさまざまな人に出会うときにも生じています。私たちの住む社会は、民族・宗教・職業・年齢など、さまざまな社会的カテゴリーによって構造化されています。社会的カテゴリーを使用することによって、私たちは外界を単純化し、秩序だてて把握することができるのです。

これまでの研究から、人を分類するカテゴリーとしてもっとも利用されやすいのは人種カテゴリー・性別カテゴリー・年齢カテゴリーであることが知られています。

中略

加えて人を分けるカテゴリーの場合に重要なのは、そこに必ず「自分が含まれる集団」「自分が含まれない集団」という視点が存在することです。人間は社会的動物ですが、人が集団を形成していく際には必ず自分が含まれる「内集団」と、自分が含まれない「外集団」が生じてきます。日本語では仲間集団を示すときに、「ウチらは…」とか「ウチの家族は…」といった表現が用いられます。この「ウチ」にあたるのが内集団です。一方、自分の仲間と異なる人々を指すときに、「ソトの人」といった表現が使われます。ガイジンという表現も、日本人を内集団としたときのソトの人という意味になっています。このときの「ソト」にあたるのが外集団です。

中略

人が集団を形成していく際には必ず「内集団」と「外集団」が生じてきます。そして自分を含んだ社会的カテゴリーの価値や評価は自分自身の価値や評価に反映されます。このため内集団の価値が世間的に高く評価されれば、自分自身の価値が高く感じられることとなります。このことが自分を含む内集団と、含まない外集団に他者を分けた場合に、おのずと内集団の価値を高めたいという動機に結びついていきます。内集団をより高く、外集団をより低く位置づけるように個人の主観的な価値づけや評価が働く現象は「内集団ひいき」とよばれています。

中略

人が社会的カテゴリーに分かれるだけで、内集団ひいきの方向に評価が向かっていくことになるなら、偏見やステレオタイプを社会から取り除くことは、かなり難しいといえます。なぜなら内集団と外集団を分けることは、人間の基本的な傾向だからです。また内集団と外集団を分ける線が、国籍や政治的な立場や文化であることを考えると、偏見やステレオタイプの形成や変化は、個人の認知的な問題だけでなく、広く社会的構造に関わってくるものと位置づけられます。戦争によって一つの国が二つに分裂すると、そこに内集団・外集団が生じてきます。その結果として両者の間に新たに生じたステレオタイプや偏見は、まさに社会的構造が生み出したものといえるでしょう。

後略

※¹ ステレオタイプ：社会的に共有された固定的な観念ないしイメージのこと

※² 知覚：外界の事物について知ること。

資料3 グローバル社会における多様性と偏見

前略

偏見や差別される人の痛みは「足を踏む人」、「踏まれる人」という例で表現されることがある。足を踏んでいる人は、踏まれている人の足を踏んでいることに気づいていないことがある。また、踏んでいることに気づいていても知らんぷりしている人もいる。しかし、踏まれている人は痛みを伴う。こうした足を踏んでいる人、踏まれている人以外の人は、「足を踏まれている人＝差別されている人」の痛みや不当な扱いを見て同情するかもしれない。また、「足を踏んでいる人＝差別している人」に対して、こうした行動を絶対すべきではないと思うかもしれない。さらに、「自分でなくてよかった」と思う人もいるかもしれない。このように思う背景には「差別する人」と「差別される人」以外に「私の存在」は除かれている。自分とは関係なく向こう岸から火事を見ているような状況で傍観視している状況がある。

こうした対岸の火事の状況は「差別する人、差別される人」の二分法から成り立っており、対岸の火事を見守るものが差別をしないという保証はない。また、差別されている人が差別しないということもありえない。さらに、自分が無意識におこなっている言動が相手に差別されていると感じさせることもあるかもしれない。偏見形成のメカニズムを考えると、偏見をなくすことは難しいため、全ての人が偏見に伴う差別を絶対しないこともありえないだろう。つまり、私たちは全ての人が偏見を持ち、差別する可能性をもつことをまずは自覚することが重要ではないかと思う。

日常生活における偏見や差別に関する問題は、人間関係にとって繊細で微妙な話題であるため、多くの場合、私たちはこのことには触れずに回避している。また、回避しようとしているのかもしれない。しかし、すべての人が差別する可能性があるならば、この状況について考え向き合わざるをえないであろう。そのためにはまず、日常生活の中に「自分自身」を入れ込んで、自分のこととして考えてみることからまず始ま

るのではないかと思う。偏見低減にはシャープな人権意識を作ることが重要だと言われているが、シャープな人権意識は「私」をその場に入れ込むことである。

グローバル社会の偏見について考えると、私たちを取り巻く状況や文脈、社会、文化、時間が変化することが前提となる。そうするとマジョリティ^{※3}側にいた自分がマイノリティ^{※4}側の自分になる可能性をいつも等しくもっていることがわかる。たとえば、今の自分が差別や偏見にさらされていなくても、留学や転勤のため外国生活を送ることになれば、これまでマジョリティ側にいた自分がマイノリティ側に移行する。また、私たちはいずれ誰でも高齢者になる日が来る。病気になり足腰が弱くなり一人では階段を上れなくなるかもしれない。目も見えなくなるかもしれない。ある集団の中で差別する側にいた人は、別の集団では差別される側にもなる。このように、文化移行などの空間軸と加齢による変化などの時間軸を考えると、マイノリティとマジョリティは固定化されていない。私たちはいつでもマイノリティになりうる変化しうる動的な（ダイナミックな）存在である。つまり、グローバル社会における多様性とは、いつでも変化しうる動的な（ダイナミックな）多様性であると定式化できる。このように考えると、偏見や差別を行うことはまったく意味を持たないことといえる。マイノリティの立場を想像し共感することができる感性と、偏見や差別を受けている人の問題を「私自身」の問題として痛みを共有できる感性こそが重要であろう。

※3 マジョリティ：多数派

※4 マイノリティ：少数派